

2021年12月26日

聖家族の主日

菊地功大司教 メッセージ

皆様、主の降誕おめでとうございます。

誕生した幼子は、飼い葉桶に寝かされて、聖ヨセフと聖母マリアによって、そのいのちを守られています。受肉した神のみ言葉は、家族のうちに誕生し、家族によって守られ、育まれました。降誕祭直後の主日は、聖家族を黙想する日であります。

使徒ヨハネは、「神の掟を守る人は、神のうちにいつもとどまり、神もその人のうちにとどまってください」と記しています。まさしく聖家族を構成する聖ヨセフと聖母マリアは、神の言葉に従順に従い、その御旨の実現のために人生を捧げられたことで、神の掟を守る人であることをあかしし、その故にこの家族のうちに神は常にとどまり、この家族を聖なる家族とされました。

ルカ福音は、イエスが十二歳になったときの家族の話を書いています。過越祭のためにエルサレムに上ったとき、その帰路、少年イエスがエルサレムに残り、家族と離れてしまったときの逸話であります。

三日目に見出されたイエスは、自らが神の子であることを明示され、真の家族は神のもとにあることを示されますが、同時にイエスは、神の掟を守る二人から離れることなく、そのもとにとどまるために、両親と一緒に旅を続けます。

私たちが教会共同体を考えると、そこには「地上の教会と天上の善に飾られた教会」が実在し、互いに別なものではなくて「複雑な一つの実在」を構成していると教会憲章は指摘します。同様に、家族においても、地上の家族と天上の家族があり、私たちは、その両者によって育まれる存在です。

教皇フランシスコは使徒的勧告「愛のよろこび」の冒頭に、「家庭において生きられてい

る愛の喜びは、教会にとっても大きな喜びです」と記します。その上で、「家庭が健全であることは、世界と教会の将来にとって、決定的に重要なことです (31)」と記します。

しかし同時に、現実の世界では理想とするような家族ではなく、厳しい状況に直面する家族や崩壊してしまった家族、また家族そのものが存在しないような状況があることを認識し、教会のこれまでの態度を反省してこう記しています。

「私たちは長い間、恵みに開かれるよう励ますことをせずに、単に教義や生命倫理や道徳の問題に執拗にこだわることで、家庭を十分に支え、夫婦のきずなを強め、彼らの共同生活を意味あるものにしたと信じてきました。(37)」

司牧的配慮の重要性を説かれる教皇様は、その上で、「教会は、家庭の中の家庭であり、すべての家庭教会が持ついのちによって、たえず豊かにされています」と記して、教会と家庭のきずなを強調されています。

回勅「兄弟の皆さん」において教皇様は、教会共同体という家庭でともに旅するようわたしたちを招かれ、そのためには兄弟姉妹のきずなのうちに連帯しなければならないと強調されます。神の掟を守ろうとするわたしたちは、共同体の中に神がいつもとどまってくださることを信じています。この共同体は、私たちにとって天上の家族に連なる家族であります。教皇様は、「私たち信者は、神は万人の御父という理解がなければ、兄弟愛の呼びかけに盤石な根拠はない (272)」と記します。この現実の中で、聖なる家族の一員となるよう招かれる主に、積極的に応えましょう。